

屋久島いきもの調査隊通信

瀬切の森からの手紙



	時には昔の話を (4) 2004年	02
	調査員からのクーコール (8) 西原貴美さん	04
	調査メシ (8)100個の餃子	06
	やくざる七つ道具 (8) いす	08
解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし (8) ヤクシマタゴガエルの分類学的再評価		10
	ヤクザルなよんこま (8)	13
	屋久島の森の住人たち (8) ヒサカキ	14
	24時間戦えますか (4) 続括者の午前中	16
	犬山より	18



2004年

1989年から始まったヤクザル調査隊。これまでさまざまなことがありました。過去のある年を取り上げて、その年の調査を振り返ります。

昨年、2023年の調査では、集合日のしょっぱなから台風のために閉じ込められ、実に6日間もの間、避難生活を送りました。これと同じくらい長いあいだ、台風による避難生活を送ったのが、2004年です。

調査中にも、いつものこととはいえ、大小いくつかのトラブルがありました。食当隊長の黒田まほさん(2003、2004)が、自分が食当の日の夕食に、翌日の弁当に取っておくはずのチリコンカンを全部出してしまうたり、もうひとりの食当隊長の佐藤真一郎さん(2001-2004)が導入した新メニューのトムヤムクンの刺激が強すぎて、何人もの人が胃腸の不調を訴えたり、好廣さんのお母様が調査中に亡くなって、永田の柴鐵生さんが終点テン場まで迎えに来てくれたりしました。3班から4班にかけて行動圏を持つSY群が頻りにサブグループピングをして、全容をつかむのは困難を極めました。今になって振り返ると、翌年SS群とYY群に分裂したことの予兆だったのでしょう。

後期調査第4日目、915hPaの台風が、屋久島をまっすぐ目指していることを知りました。その後毎日、今日にも下山か、というつもりで過ごしましたが、幸い、最終の調査第7日である8月26日の午後1時まで調査できました。この日の調査後すぐ下山し、一湊にある町の施設に避難しました。ここは、かつて測候所だった場所です。



キャンプして暮らしている調査中、テン場を守る屋根として必需品の青フラは、下山してきてすぐ、まだ雨は降らないけど風は強く吹く中、先に測候所に避難してきた人たちが大風にあおられる、という例年にない方式で乾かしてくれました。ですが、台風が接近して、集会場で窓の隙間から雨やら砂やらが吹き込んでくるようになり、下界でもまたもや大活躍したのです。電気が通じなくなったらランタンを使い、断水する前にポリタンクに水を貯めました。写真とコラージュ、藤野正也さん(2002-2006)



避難生活中何度も開かれた、そしてこれが最後の大宴会。調査隊のテーマソング「モグラの祭り / 三岳賛歌」を大合唱しました。お菓子が大量にありますが、みなさん「米がなくなるかも!?!」という恐怖から解放されて宮之浦に買い物に行ったら、もう明日は離島というのに、食べきれないほどのお菓子を買ったのでした。

翌日、フェリー屋久島2は欠航し、飛行機のキャンセル待ちは200人以上で、台風襲来前には誰一人脱出できませんでした。最初のうちは、台風するときには恒例の滝巡りをしたり、データの入力をしたりして過ごしましたが、2日後には風雨が激しくて外出は不可能になり、電気も完全に止まりました。窓の隙間から雨水が漏れ出し、外で舞い狂っている一湊浜の砂が部屋の中にまで吹きこんでくるので、青フラを引っ張り出して、おおわらわで始末しました。景気づけに小麦粉パーティをしよう、ということになり、クレープやお好み焼きを作って食べたりしましたが、その最中に食当隊長が首っ引きで計算したところ、このままのペースだと翌日には食料がなくなることが発覚しました。そこで、夕食は食料を3分の2カットしました。

台風が屋久島を直撃したのは8月30日の午前3時ごろでした。気圧は950hPaまで下がり、最大風速は48mでした。2時半には消防団の人たちが「大丈夫か!」と見舞いに来てくれました。最後には断水。これに備えてあらゆる所に水をためておいたのでとくに困りはしませんでした。こうなるとテン場よりよほど不便でした。午後、ようやく外に出られるようになり、全員で宮之浦に行ってみましたが、レンタカー屋のプレハブがつぶれていたり、信号があさっての方角を向いていたり、すさまじい被害でした。

この日の夜の宴会は、調査隊史上に残るものだったと思います。集会場で全員がペットボトルやら酒瓶やらを手に取り、回りながら踊りながら「モグラの祭り / 三岳賛歌」を大合唱しました。昨年の避難生活は、「今年、ほんとうに調査できるのだろうか?」という不安と隣り合わせでしたが、2004年は、全日程調査してしまって、みんな仲良くなったあとの缶詰生活で、考えてみればこれほど楽しいことはなかったかもしれません!

(半谷吾郎 1993-2023年参加)

好和荘ができる前は、下界での宿泊は栗生のキャンプ場(青少年旅行村)でした。そもそも台風で下山するためには、まず避難する場所を探すことから始めなくてはいけません。この測候所跡や、好廣さんが以前住んでいた永久保の公民館には何度もお世話になりました。

調査員からの クークール

8

クークールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。
各界で活躍する調査隊 OBOG に、クークールを鳴いてもらいました。

西原貴美 (なにわライダー初号機) 2004、2005 年参加

調査隊に参加したのは、ついこの間だったような気がしている。でも冷静になってよくよく考えてみると、20 年前であった。月日の流れは怖い。思えば 20 年前、ヤクザル調査隊参加の 1 年目は、鳥取大学農学部森林科学コース 3 年生の時だった。買ったばかりの [なにわ] ナンバーの 250cc のバイクで鳥取から鹿児島まで下道をひた走り、愛車ごとフェリーに乗ったのだった。そうして、初対面の座馬さんからいただいたヤクザルネームが「なにわライダー初号機」。それ以来、調査隊ではみんなに「なにわさん」と呼ばれるので、かなり長い間それが本名だと思われていた。そして翌年、山上での楽しさが忘れられず、4 回生の夏に卒論を放り出して再び屋久島行きのフェリーに乗ったのだった。今度はバイクなしで。

あれから今まで色んなことがあった。4 回生の夏に卒論を放り出しはしたものの、ギリギリ卒業までに書き上げて無事に大学を卒業。ただ就活をする気が全く起きず、秋にひとつだけ受けていた大阪の家具製造メーカーになんとか滑り込む。今考えれば無謀にもほどがある。そしてそこを 3



年で退社し、1 年間木工の職業訓練校に通い、家具を作る勉強をしつつ人生の夏休みを満喫。その後、岡山と鳥取と兵庫の県境にある岡山県西粟倉村の木工会社に就職が決まり移住。同社を 2 年後に退社。そして 2013 年、村内に自分で内装を全て手がけた店主 1 人だけの小さな食堂「フレル食堂」を開店。木工の技術はここで生きてくる。その間に結婚と出産も経験し、娘は現在小学 3 年生。そしてさらに 2020 年、築 200 年の大きな古民家と出会い、鳥根県大田市に移住。ここでも自分で古民家を改修し、床を貼り壁を塗り、食堂を一から作り直して今に至る。食堂では、鹿肉、猪肉、山野草をつかった料理を提供している。

改めて思い返してみると、なかなか脈絡のない人生である。ただ「山の近くに住みたい」と「ご飯屋さんをやりたい」という幼い頃からの夢は両方叶っているの、人生とは分からないものだ。

これまでの人生の分岐点で、調査隊のことを思い出さなかったことはない。むしろ、ここぞという時の選択は、調査隊で吸収したあれやこれやが判断の基準になっている。それは簡単に言語化できるものではなく、何かこうふんわりとした空気感のようなものである。山の上での、あの特別な空気。あの場に 2 年連続でいられたことは、間違いなくわたしの人生の糧になっている。「バイトの / アミーゴ / 店長の / 友達の」鈴木さんに教えてもらった骨の美しさ、すがやしの「でるね」「安全運転」、半谷さんの器の大きさ、座馬さんのお酒の飲み方、藤野さんの人とは一味違う視点、じ(ゅ)っちゃんのかげがえのない笑い。雨上がりのテン場での太陽の有り難さ、もう一人の鈴木さんエゾジカの尻当て、山で迷子になった時の心構えやヘビの美しさ等、他にも書ききれないほどたくさんのエッセンスで今のわたしはできている。



現在の夢は、母娘共にバイクでヤクザル調査隊に参加すること。半谷さんからは「そこまで頑張ってください」と言質を取ったので楽しみにしている。陰ながら今後も調査隊を応援しています！

調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘を、レシピとともに語ります。

柚木 香乃 2023年参加

100個の餃子

屋久島では避けることのできない台風。私が参加した2023年の調査では、1週間ほど調査どころかテン場生活さえできず、好和荘で缶詰となってしまった期間がありました。やっと台風が去った後も、大川林道がつぶれていて通常の調査ができず、復旧までは西部林道で、下界からの日帰り調査をすることになりました。

実は、台風がもたらすのは嫌なことばかりではありません。下界では、森の中では手に入らない野菜や果物、お刺身や、炊飯器で炊いたお米や、手間暇かけて作った料理を食べることができます。手巻きずしや豆腐ハンバーグ、からあげ、フルーツゼリーなどを、ものすごく激しい雨の音を聞きながら大人数で食べた思い出は忘れられません。

数ある料理のうちで、私が一番印象に残っているのは、皮から手作りの餃子です。台風が去り、外に出られるようになって2日目。「食当ノートを見て、今まで誰も作っていない料理を作っておいて。」という言葉を残して西部林道での調査に向かった仲間たちを見送り、好和荘に残された休息組4人で夕食のメニューを考えました。台風に備えて買った大量の小麦粉を消費したい。傷みそうな野菜を使ってしまうたい。夕方まで無駄にたくさんある時間をつぶしたい…など、いろいろなことを考えた結果、中国からの留学生の王さんに教えてもらいながら、餃子を作ることに決めました。目標個数はなんと100個。

午前中に買い出しに行って、午後2時ごろから作り始めました。薄力粉と強力粉と塩少々をボウルに入れて、ぬるま湯を加えながら箸で混ぜます。ぼろぼろしてきたら手でこねてまとめて、ラップをかぶせてしばらく休ませます。生地を棒状に伸ばして切り分けて、平べったく伸ばします。そのあとひき肉と刻んだ野菜で作った餡を包み、準備は完了。時刻は午後4時過ぎ。本場中国では焼き餃子よりも水餃子のほうがポピュラーだということで、大量の餃子を大きな鍋でゆでながら、仲間の帰りを待ちました。

餃子づくりのポイントは、細かく刻んだもやしで餡のかさましをすること(もやしの水分で、ジューシーな餡になります。もやしてすごいい!)と、包むときに少しくらい皮が破れても、形が不格好でも、気にしないこと(いちいち気にしていたら、いつまでたっても包み終わらない!)。薄力粉と強力粉の割合はお好みで。薄力粉多めだと歯切れのよい生地に、強力粉多めだともちもちの生地になります。

ゆでる前にお皿にくっついて皮が破れてしまったり、2口あるコンロのうち1口がいきなり故障してしまったりなどトラブルがあってヒヤヒヤしましたが、なんとか大量の水餃子と、付け合わせの炒め物とスープを完成させることができました。柔らかくて温かくて、とてもおいしかったです。数えてみたら100個以上ありました。こんなに大量の餃子を一度に作るなんて、普通に生きていたら体験できないことです。屋久島から帰ってきて、家族に自慢しました。

たくさん時間をかけて作った餃子でしたが、食べてしまうのはあっという間でした。でも、みんなでおしゃべりしながら楽しく餃子を作ったことは、約半年たった今でもはっきり覚えています。

小麦粉を大量に消費したいとき、無駄に時間が余っているときに、ぜひ餃子を作ってみてはいかがでしょうか。



おいしくできあがった餃子。左手前の人が筆者の柚木さんです。

みんなでわいわい楽しく作ることができる餃子は、打ち上げ料理の定番です。ふだんの年は日本式の焼き餃子ですが、去年は中国の人が指揮してくれたおかげで、本場の味を食べられて幸せでした。

やくざる七、道具

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。35年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

いす

昨年12月のサイエンスカフェで、今年の調査の写真を見て、20年前の調査員が、「テン場でいすに座っている！」と驚きました。え、そこ!?

今、テン場にしている大川林道終点を調査隊が初めて利用したのは(冬の調査を除けば)、1995年のことです。当時は、ここを中心にして、そこから森の中へ荷物を担いで上がっていき、山の中でいくつもテン場を作って泊まっていた。ですので、大川林道終点のテン場は、ベースキャンプと呼ばれていました。現在の調査地に場所が固定され、20人以上が大川林道終点に泊まるようになって、テン場の作り方もだんだん固定されてきました。最終的に現在のテン場とほぼ同じ状態のものが作られるようになったのは、2000年のことです。終点道路わきの崖を利用して、ブルーシートで天井を作り、雨が降っても全員が入ることができるスペース、「集会場」が作られました。当時は、まだ周囲の原生林を伐採した跡が生々しく、そこら中に切り株が転がっていました。それらを使って、大きくて平たいものは机に、丸太はいすになるように集会場に一列に並べるという作業を、高畑由起夫さん(1992-2004年)がやってくださいました。夕ご飯は、天気がよければ集会場を出て、青空の下、林道にブルーシートを敷いて、みんなで輪になって食べていました。運悪くご飯時に雨が降って



2000年の調査で、集会場を整備している高畑さん。

きた場合は、みんなですし詰めになって、集会場で食べることになりました。2000年は天気が悪く、調査員が顔を合わせるのは集会場だけ、という日が、何日も続きました。高畑さんのおかげで、天気が悪くても、調査員が集会場に集まっているいろいろな話をして、楽しく過ごすことができました。

自然物ではないいすや机が初めて導入されたのは、2008年です。この年、食料テントにネズミが入り、食料を食べられてしまいました。その対策として、コンテナを一つ購入して、そこに食べられたら特に困る食料を入れることにしたのです。このコンテナは、その上に座ることができ、いすとしても使われました。このころ、それまでいすに使っていた木が腐って、使えなくなってきました。2010年の調査後と2011年の調査前に、コンテナを買い足し、さらに折り畳み式のいすを購入しました。あわせて、いすにもなるコンテナ3つ、一人掛けのいす4つ、長いす2つ。コンテナと長いすに、ぎゅうぎゅう詰めで3人掛けすれば、19人分のいすが用意されたこととなります。当時の参加人数は、前期が25人ほど、後期が28人ほどで、30人になる年もありました。その後も少しずついすやコンテナを買い足して行って、だいたいの人がいすに座り、数人が丸太に座る、というスタイルが続きました。

2020年以降、コロナのせいで調査員の数を圧倒的に減らしたため、それまで20数人用の装備が用意されていたのが、10人程度にまで人数が減って、テン場での生活の質が格段に上がりました。今では、長いすに3人で座る人は、まずいません。外で食べる時は、ブルーシートを敷いてその上に座るのではなく、いすを集会場から持ち出して、そこに座って食べます。たしかに、20年前と比べると、とても大きな違いです!

(半谷吾郎 1993-2023年参加)



左、2012年の調査での食事風景。右、2023年の調査での夕食前のひととき。

解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし 8

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

ヤクシマタゴガエルの分類学的再評価

江頭幸士郎 2005、2006 年参加

Eto, K., & Matsui, M. (2023). A new brown frog from the Goto islands, Japan with taxonomic revision on the subspecific relationships of *Rana tagoi* (Amphibia: Anura: Ranidae). *Current Herpetology*, 42, 191–209

分類学の基本的な目的はもう 200 年以上大きく変わっていません。この生物は既知の種と同じものなのか、別の（まだ名前のない）独立種なのか？他の生物とはどういう類縁性があるのか？突き詰めていけば、この二つの問いが一貫して根底にある学問といえそうです。一方でその証明のための手段は日々進歩しています。生物の形のみを基準にしていた時代に始まり、いつ頃からか行動や生態の情報も取り入れられ、今では基礎的な DNA 解析は当たり前、非モデル生物であっても縮約ゲノム解析に手が届くようになりました。

屋久島の森で足元を賑わすカエルの一つ、ヤクシマタゴガエル（以下ヤクタゴ）は長い間本土のタゴガエルの亜種でした。近くにいい感じの沢さえあれば、花之江河から尾之間温泉の裏にまで出没する、島を代表する両生類の一つです。タゴガエルとはわずかな外部形態や軟骨の特徴の違いなどをもとに区別されましたが、別種とするほどの違いではなкаろうと判断されたのか、当初から亜種として記載されました。私も初めてこのカエル

を見た 2005 年のヤクザル調査では「模様は変わってるけどまあタゴガエルに見えるな」と思った記憶があります。それから 10 数年を経て、「本当にタゴガエルと同種なのか？」という疑問に一応の決着をつける機会を得ました。

このカエルは古くは 1980 年代から、タゴガエルの地域個体群と見なすには遺伝的な分化が大きいらしいことが指摘されていました。2009 年に大学院に進学して、タゴガエルの仲間の種分類に着手しようと決めた私は、ヤクタゴについても見直さねばとヤクザル調査以来ご無沙汰していた屋久島に向かいました。島では普通にいるカエルだからそう苦労はないだろう、とこの時点では思っていました。結局何度も島を訪れる羽目に。手こずった最大の理由は、このカエルがなかなか鳴き声を録らせてくれなかったからです。本土のタゴガエルと繁殖時期が違っておりイマイチ勘が働かず不発だった一回目、おそらく時期は悪くなかったが滞在中風雨でまともに録音ができなかった二回目、雨はほどほどだったものの通行人が多くて録音が捗らなかった三回目を経て、四回目にしてようやくデータが充足しました。本当は欲を言えばもっと録りたかったし、何より島に行くのは楽しかったのですが、この頃にはすでに大学院を出る段になっていましたし、手持ちの札でどうにかすることにしました。

鳴き声のデータを求めたのは、それがカエル類の研究において種認識／交配前隔離の情報として重要視されているからです。これとは別に、自身で行った遺伝解析においても先行研究と同様、ヤクタゴはどうもタゴと違うらしいという結果が出てはいたのですが、種を分けるからには何かしら野外で観察できる違いが欲しかったのです。しかし録音はできたもの

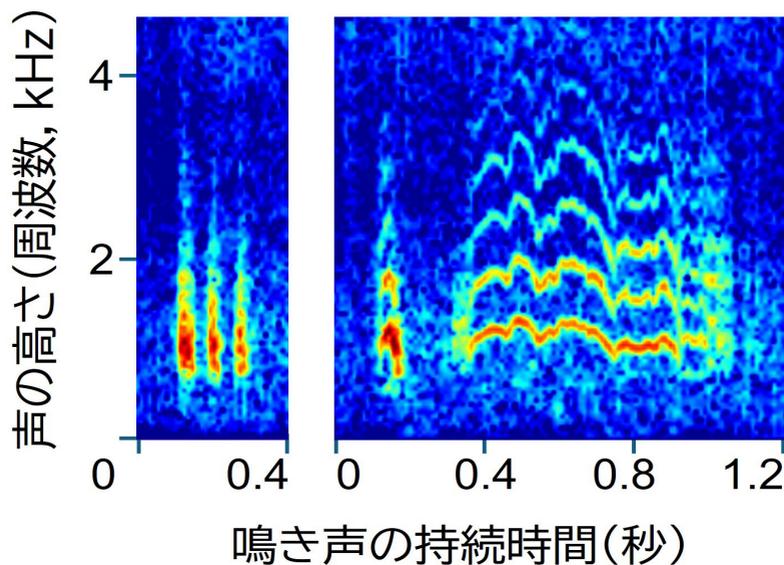


ヤクシマタゴガエルの抱接ペア

江頭さんがヤクザル調査に参加されたのは、学部 1 年と 2 年のとき。当時から両生類・爬虫類が好きで、わたし（半谷）がつかまえたシマヘビを彼に進呈したら、うれしそうにいました。彼がつかまえたマムシは、好廣さんに食べられてしまいました...

その先にまたひと苦労ありました。ヤクタグのオスは、一繁殖地内でもいろんな声を出すのです。鳴き声の比較を行うには、同じ用途の鳴き声を群間で比較しなければなりません。研究目的が種分類なら、種認識に効いていそうな、たとえば繁殖期のオスがメスにアピールする声（広告音）を比較したいところです。しかしヤクタグはレパートリーが多いので、どれが広告音なのか現場ではイマイチよく分からない！過去の観察報告や、自分の録音データ中の出現頻度、定性的評価になってしまいますが前後に発せられた別個体の声との関係性などを勘案して、3音前後からなるごく短い声を、本種のオスの基本的な広告音とみなすことにしました。この他、割愛しますが形態や核DNAの解析なども実施して、最終的にヤクタグ、それから当時同じくタゴの隠岐諸島産亜種とされていたオキタグガエル、および五島列島のゴトウタグガエルを、それぞれ独立種とすることを提唱しました。

初期の調査の不発には悩まされましたが、穴ぐらの中で繁殖するため日中に接近してもよく鳴いてくれ、しかもいろんな音で飽きさせずにいてくれるヤクタグの声を、屋久島の森で聞き続けるのはなかなか贅沢な時間でした。調査隊が入山するのは本種が鳴かない夏なのであまり聞く機会がないかもしれませんが、もし冬や春に滞在することがあればぜひ耳を傾けてみてください。



雄の声紋(下)。左は本種で一般的な広告音。右は現場でよく聞かれるものの文脈が不明な声の一例

ヤクザルなよんま

毎度のことながら

巨大なメインザック 必需品でいっぱい テニ場生活に欠かせない

つい大荷物 あれもこれもと詰めこんで

歩荷する？ 重みでフラフラ

入山下山の車 バックはお見事 このザックたちをすしすし

屋久島の森の住人たち 8

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象である二ホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

ヒサカキ (*Eurya japonica*)

本州各地、伊豆七島、四国、九州（対馬を含む）、琉球、朝鮮半島南部および済州島、台湾の暖帯に広く分布する。



この連載の第2回で、わたしにとって屋久島を代表する植物は、ヤクスギ林の林床をびっしり覆っている木、ハイノキであること、毎木調査を行うと、ハイノキは本数で1位、サルの食べ物としても、もっとも重要であることを紹介しました。ヒサカキは、ハイノキに次いで、重要な植物です。わたしが瀬切川右岸の原生林に作った50メートル四方の植生調査区で、生えている本数は、ハイノキの1720本に次いで、第2位の650本。年間のサルの採食時間割合では、ハイノキの17%に次いで、これも第2位の12.9%。成熟葉も、果実も、花も食べます。ヤクスギの森の林床は、この2種がびっしり覆っています。そのどちらもがサルにとっての重要な食べ物だということが、二ホンザルの生息地としての、ヤクスギの森の大きな特徴です。たとえば、ヤクスギ林では、群れ同士が出会ってもほとんど争いが起きませんが、食物がそこら中に散らばって分布しているので、ほかの群れと争って食物を防衛しようとしないう、ということが、その理由の一つかもしれません。

一部のヤクザル調査隊の調査員にとって、ヒサカキは忘れようにも忘れられない植物です。調査中、何人かで手分けして、調査地にあるいくつかの5メートル四方のプロットにある、サルが食べる果実の個数を数えるという調査を行います。サルが食べる果実のうち、プロットに出てくるく

らい本数が多いのは、ヒサカキ、ハイノキとオニクロキだけで、その中でもヒサカキは、例年、結実個数の99%以上を占めています。ヒサカキはどれだけ大きくても、高さ5mくらいにしかありませんが、それでも直径5、6mmの実が、びっしりついています。

2018年に、わたしとはある調査員と一緒に結実調査を行いました。わたしが木を探し、彼女には時間がかかりそうな木で数えてもらおうと思って、プロットについてから、まず、ずいぶん実がありそうな木で、実の数を数えてもらうことにしました。「たぶん、40分とか1時間とかかかると思うよ。がんばってね」と、彼女に言ってから、1時間経ち、2時間が経ち、まだ彼女は数え続けています。途中で数えるのをやめるとどこまでやったかわからなくなってしまいますから、わたしも黙って見守り、もうそろそろお昼ご飯を食べたいという頃になって、ようやく終わりました。彼女が数えた実の数は、20,497個でした！彼女は、「カウンターが9999から0000になるのを2回も見られて、楽しかったですよ」と言っていました。これほど強靱なというか、楽天的な精神の持ち主を、わたしはほかに知りません。この調査は、これまでほかに何人もの人に頼みましたが、「あまりにつらくて、あのあと、ヒサカキの粒粒を数える悪夢を見ました」とか、「今まで、自分は植物のことが好きだと思っていましたが、植物の調査が好きじゃなくなることが分かりました」とか、言われましたから…

ハイノキが屋久島ではヤクスギ林にしかない植物なのと違い、ヒサカキは低地にもたくさんあり、さらに言えば日本の照葉樹林なら、どこにでもある植物です。そのことを生かし、最近わたしの研究室で進めている腸内細菌の発酵実験では、ヒサカキの葉を発酵の基質に使っています。京都



大学犬山キャンパス内で大量に採取したヒサカキの葉は、屋久島だけでなく、ボルネオに持って行ってオランウータンの糞と混ぜ、来月には、ガボンに持って行って、ゴリラやチンパンジーの糞と混ぜて、発酵させる実験を行う予定です。

(半谷吾郎 1993 - 2023年参加)

5メートル四方のプロットで、カウンターを片手に、ひたすらヒサカキの実の粒粒を数える調査員。

屋久島の標高の高いところには、ヒメヒサカキ (*Eurya yakushimensis*) という、同属別種があります。ヒサカキの実がまだ熟さず緑色をしている、8月から9月にヒメヒサカキは熟し始めます。ヤクザル調査の調査地は、ちょうどこの2種が両方生えているところです。

24時間戦えますか 4

バブル期のCMソング「24時間戦えますか」は、調査隊の替え歌の傑作「20日間戦えますか」の元歌です。朝から晩まで、いろいろ詰まった調査の一日を紹介します。



統括者の午前中

統括者はテン場を出発後、多くの場合定点調査員を送るところから始まります。統括者とは言え行ったことのない定点へ送ることも度々あり、定点調査員と同じく定点につくまで多少不安を抱えているのはここだけの話です。先輩調査員からは、統括者が定点調査員に置いていかれるようになったらヤクザル調査隊の引退どきと言われています。私は今のところ置いていかれていないのでまだ大丈夫そうです。まあヒトの追跡で置いていかれるようでは、私の修士研究のサルの追跡などできないですが…。

定点調査員を送ったあとはよいよサルの追跡です。と言いたいところですが、大川林道のサルは簡単には追跡させてくれません。今回はそんなサルが追跡できていない時の午前中の統括者の時間の過ごし方について軽く紹介します。まず、サルを追跡できていないときは対象群の位置の推定から始まります。位置を推定する上で重要なのが定点からのサル情報です。遊動域内の定点から音声などのサル情報があれば、その周辺に向かいサルを探します。運が良ければ、サルを目視できたりサルの音声を聞くことができたりしますが、定点から音声の情報があったとしても、向かうとすでにサル情報は全くなっていることもしばしばあります。また、そもそも定点からの情報が全くない時もあります。このような場合、なんとかサル情報を得るために統括者それぞれの担当区画を決めて林道上を歩きます。ヤクザル調査隊の強みであるマンパワーがあるからこそできる戦

略です。基本的にはサルが見られた時にカウントしやすい林道を歩きますが、人数が十分いれば一部の人は林道ではなく森林内の決まったルートを歩くこともあります。統括者としての経験はまだ浅いですが、サルを追跡する時間よりも林道でサルの情報を得ようと足掻いている時間の方が長い印象です。ただ、サルを追跡できていないこの時間はデータを集めていないのと同じであり、仕事をしていないことを揶揄してファッション統括と呼ばれることもあります。そんなファッション統括は、基本的にはひたすら林道を往復しつつ、隣の区画の統括者との交流が主な時間の過ごし方です。最初は隣の統括者とサル情報の有無の確認やたわいも無い会話をしますが、次第に顔を合わせると互いに首を振り、来た道を引き返すようになっていきます。また、往復中に隣の統括者と会えないと思っていると、林道上で寝ている調査員と遭遇することもあります。そんなサル情報が得られずモチベーションが下がっている統括者の気合を入れ直す言葉が「作戦会議のため一度集まりましょう」です。作戦会議とは名ばかりで、一緒にお昼を食べる隠語なのですが…。作戦会議では、ガスを用いてレトルトなどの若干豪華な温かい食事を一緒に食べてしばし談笑します。こうして午後の調査に向けて英気を養い調査を再開するのです。さて、午後はファッション統括を脱却できるのでしょうか？

(金原蓮太郎 2021-2023 参加)



サルを求めてひたすら林道を歩く、その長さは、群れの行動圏の大きさによります。広いときは2km弱を2人でカバーすることもあります。たった500mくらいの範囲に、統括者3人、さらに定点調査員も一緒にひしめきあっていることもあります。

犬山より

編集後記のタイトルは「犬山より」ですが、今回は屋久島で編集作業を行いました。

屋久島に来たのは、指導する大学院生が調査を始めるにあたり、その最初の1週間だけ、わたしもついて行って、どのように調査を進めるか、一緒に考えるためです。調査最初の日、調査地へ向かう車の中で「どう、緊張してますか？」と彼に聞いたら、「緊張してます」とのこと。わたしも、26年前に、自分の調査を最初に始める前に、サルは見つかるか、植物は覚えられるか、データが取れても「有意差」が出るか、いろいろなことにどきどきしていたことを、懐かしく思い出しました。

調査前の寒波で、大川林道終点の調査地が雪に埋もれていたり、昨年のヤクザル調査のときの台風で橋が吹っ飛んだままなので、屋久島を一周大回りしないと調査地に行けなかったり、たいへんなことはいくつかありましたが、ともかくも順調な滑り出しができたと思います。わたし自身は、明日には屋久島を去り、さらにあと1週間ほどで、次は別の大学院生の研究のために、地球の裏側の国で野生類人猿の調査に出かけます。彼ら彼女たちが、自分の調査を成し遂げることで、また一回り成長して、その力を今年のヤクザル調査で発揮してくれることを願っています。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第8号

2024年1月31日 発行

発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊

住所：484-0003 犬山市善師野伏屋7-1

ホームページ：<https://yakushimaikimono.com/>

メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com

編集：半谷吾郎